

# 相談支援つうしん

＜第 79 号＞2022 年 2 月 17 日  
県立湘南養護学校 支援連携部  
相談支援係 ～教師編～

## ✚ 文脈が異なれば、同じ言葉でも意味が異なる

先日、ある学校の先生からの相談を受けて考えさせられました。それは、その学校の男子生徒 A さんに対する、個別に取り組んでいるソーシャルスキルトレーニング(SST)のことでした。

A さんは女子生徒 B さんと友達として仲良くしているそうですが、B さんが A さんのことを恋愛対象として意識するようになったそうです。B さんはその気持ちを先生に打ち明けて、A さんの気持ちを確認しようとしました。相談を受けた先生は、B さんの気持ちを A さんに伝えたところ、A さんは B さんをただの友達としてしか見ていないことが分かりました。

その後、先生は 2 人の様子を見守っていたのですが、A さんは B さんを遊びに誘ったりして、今まで通りに接していました。先生は B さんの様子が心配になって、A さんに “**B さんに思われぶりな態度をとっているのか**” 聞いてみました。すると、A さんは次のように答えたそうです。

「思われぶりな態度なんか取ってないですよ。今まで通りにしています。」

彼としては、今までも思われぶりな態度をとっているつもりは全くなかったので、**これまで通りの態度で接するのが当然**という主張でした。先生は B さんが振り回されているようなので、A さんには B さんと距離を取るようにアドバイスしたいと悩んでいらっしゃいました。

A さんは暗黙の了解を理解することが苦手であるのと同時に、字義的に物事を理解してしまったり、抽象的な概念を自分の身に置き換えて考えることが苦手という課題があります。そのため、例えば、“親しき仲にも礼儀あり” という言葉を聞けばその意味を説明できるのですが、自分の身に置き換えて、振る舞いを捉えなおすのは難しいです。彼としては B さんを友達の 1 人として分け隔てなく親しく接しても、相手が自分に対して恋愛感情を抱いてしまうという、気持ちの変化を汲み取れませんでした。そのため、自分の言動が思われぶりな態度と評価されてしまうことに思い至らなかったのです。

今回の相談を通して、“思われぶりな態度” という言葉は相手との関係性や関係性の変化によって判断が変わるものがあることを改めて考えてみました。いんざんぬれい 慎慄無礼な態度もその 1 つで、いつまでも打ち解けずに他人行儀だと、かえって冷たく思われてしまいます。SST のレベルは高い内容ですが、A さんのようなタイプの人には、**相手との関係性の変化に合わせて接し方を調整/修正すべき場合があることを教えないといけないことを**、改めて考えさせられました。

## ✚ 推論する力—演繹的推論と帰納的推論—

話は変わりますが、学習障害(LD)では、読み・書き・計算・聞く・話す・推論するといった領域での困難さが取り上げられます。このうちの「推論する」力は、解の公式を使って二次方程式を解くなど、数学にも深い関連があります。また、親しき中にも礼儀ありのようなことわざから推論し、人と接するときに言葉遣いに気をつけるようにするなど、一般的な法則や知識に基づいて推論する力もそうです。これらは特に演繹的推論と言います。一方で、**○→△→□→○→△→( )** という問題で、カッコの中に入る形を導くには、法則性やルール見つけ出して解答を導く帰納的推論の力が必要です。他の例を挙げると、

“猛犬注意”の貼り紙のある家の前を通ったら犬に吠えられた。その経験から、同じ貼り紙をしている家の前を通ったら、きっと犬に吠えられるという法則が見いだせます。ただし、この“猛犬注意”の例でも分かるように、帰納的推論は演繹的推論とは異なって、絶対的な真理というよりは、確実性はもっともらしい（蓋然的）程度に下がります。

これらの演繹的・帰納的推論の力は日常生活のあらゆる場面で活躍しています。“挨拶したら褒められる”と聞いて挨拶したら褒められた。次回も挨拶すれば褒められるだろうと演繹的に推論したり、“〇〇君みたいにやれば自分も上手くいくだろう”といったモデリングは帰納的推論の力と言えそうです。このように演繹的・帰納的推論の力を活用していくと、効率的に生活することができます。

#### ✚ 自分を客観的に振り返る～もう1人の自分～

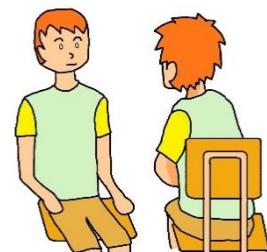
「キミヤーズの教材・教具 知的好奇心を引き出す」村上公也・赤木和重/編著 クリエイツかもがわ 2011 という文献があります。この本は小学校で特別支援学級の担任をされていた村上先生のアイデア豊かな実践がたくさん紹介されています。

その1つに子どもが自分の言動を振り返る取り組みでは、児童の等身大パネル（以下、パネル）をダンボールで作り、顔写真をそれぞれ貼ったものを教室に並べて、児童に見立てて接します。この実践は、直接叱られるときのような威圧感や圧迫感を子どもに与えずに先生の気持ちを伝えるにはどうしたらよいか、という思いからはじまったそうです。そして、実際に使用して次のような効果があったそうです。

- ✓ 子どもに直接注意するのではなくパネルに注意をすると、反抗することなく応じることができた。
- ✓ 先生が見本をやって見せるのではなく、パネルを操って見本をやってみせると、注目度が上がった。
- ✓ 自己評価の発表するときに、子ども自身が自分のパネルに「どうだった？」と質問して自答するようになると、紋切り的な「よくできた」ではなく、一歩深めた内容を発表することができた。
- ✓ ケンカした相手への怒りの思いを自分のパネルにぶつけさせると気持ちが収まり、パネルと対話をして自分の非も認め、相手に謝罪することができた。

自分にとってマイナスのことを言わると、多かれ少なかれ不快感が生じます。何の心構えもしていないとなおさらです。この方法だと、直接注意されるわけではないので少し距離をとって自分を見やすくなるようです。また、自分の分身という存在は、他人とは違う気になる存在にもなるようです。そこを上手く活用すれば学習活動への注目を高めたり、適切な振る舞いやスキルの獲得に向けたモデリングを促したりする機能も果たすでしょう。モデリングは、モデルの存在が自分と似ているなど、影響力のある存在であればあるほど促されることを考えると、とても理にかなっている取り組みだと思います。

特に、この自己内対話を促進するパネルの使い方は、ロールレタリングという自己カウンセリングの手法に重なるところがあり、とても興味深いです。紹介されている実践でも、まずは、一方的に自分の主張をパネルにまくしたて、それが出尽すと気持ちが収まり、自分の振る舞について内省を言葉にでき相手に謝罪するという経過を経ていました。自分の言い分を受け止めてもらって、初めて真の反省が促されるということを胸に留めておきたいと思います。



#### ＜参考文献＞

P. A. アルバート/A. C. トルートマン 「はじめての応用行動分析」 二弊社 2004

村上公也/赤木和重 「キミヤーズの」教材教具 知的好奇心を引き出す クリエイツかもがわ 2011

春口徳雄 ロール・レタリングの理論と実際一役割交換書簡法一 チーム医療 1995